

福祉哲学の枠組みとプロセス

—社会福祉の経験を巡る思考の循環運動—

関西福祉大学 中村 剛 (5778)

キーワード：福祉哲学 福祉思想 価値観

1. 研究目的

哲学は物事を根源から「問い考える」営みである。その営みの最も本質的なところは、学んだり研究したりするより、自ら哲学をする（問い考える）ことである。では、どうすれば社会福祉を根源から問い考える「福祉哲学」をすることができるのか。これが、本発表の「問い」である。この問いに対して、「福祉哲学の枠組みとプロセス」に関する仮説を提示し、その仮説に基づくならば、こうゆう形で福祉哲学をすることができるという実践事例を提示することが本発表の目的である。あわせて、福祉哲学を実践した結果得られた知見を考察で述べる。

2. 研究の視点および方法

科学は物事を対象化する観察者の視点に立つ。これに対して哲学は、生身の身体をもつ私（自分自身）に立ち現れる“世界という全体”、その世界で様々な経験を積み重ねている当事者の視点から行われる。そして、その経験は歴史・社会の中にある。この理解が仮説の基盤となる。さらに、小倉襄二、岩下壮一、阿部志郎、糸賀一雄ら先覚者の哲学には、哲学からあえて「福祉哲学」と区別させる独自の思考がある。ここには、社会福祉の経験を巡って、見るべきものを視る（小倉）→見るべきものを視て、そこに身を置くと、呻き・声なき声があることに気づき、その呻きへの応答として生まれる「問いと思考」（岩下、阿部）がある→「この子らを世の光に」のように、呻き・声なき声に気づき考える中で気づかれる「社会福祉にとって大切なこと」、例えば、人間理解、価値観、社会福祉の本質や原理がある→社会福祉の経験が学び直される、といった関係性がある。以上の考えに基づくと、福祉哲学の枠組みと仮説について次の仮説を提示することができる。（図参照）

「福祉哲学の枠組みとプロセスは、社会福祉の経験を巡って、社会福祉の現実にも目を向ける（見るべきものを視る）→その現実の中で声なき声を聴き、その声に応える形で問い考える（呻きに応える）→原理や本質など社会福祉において大切なことを言葉にする（一例として、「この子らを世の光に」）→社会福祉の経験…という思考の循環運動のなかで、社会福祉の経験を学び直すことである」

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守したものである。

4. 研究結果

仮説に基づくと、以下の通り福祉哲学を行うことができる。

(1) 見るべきもの（底辺）への視点の移動

“見るべきもの”とは、社会の底辺層にある“人を人とも思わぬ状況”、“無念をのみこむ無数の状況”である。福祉哲学を行うには、それらの状況にいる人たちの痛みや苦しさが心に響いてくるところに視座・視点を移し、そこから社会福祉を根源から問い考えることが求められる。ここが福祉哲学の出発点となる。

(2) 呻き・声なき声への応答の中で生じる哲学

見るべきものの中に身を置き、そこにいる人と関わると、そこには表情や眼差し、言葉にならない心の叫び、「いやだ」という拒否、あるいは、諦めの中で心の奥底にしまわれた

無念の想いと云った、嘘偽りなどあり得ない真実の声／声なき声（言葉）があることに気づく。これらの声なき声によって触発される問いがあり、促される思考がある。それが福祉哲学である。

（3）思考の仕方

福祉哲学の問いは、先覚者との対話・学び、社会科学・実践哲学／哲学、文学、宗教との対話・学び、市民や実践者との対話、現象学を用いた事象分析などを通して考える。

（4）福祉哲学がもたらすもの

問いを考えた結果として得られるのが、社会福祉の本質や原理、価値観、人間理解を体系化した福祉思想である。しかし、人間は大切なことは完全に知ることはできない。理解された見解は常に不完全である。ゆえに、福祉哲学という社会福祉の経験を巡る思考の循環運動は繰り返される。

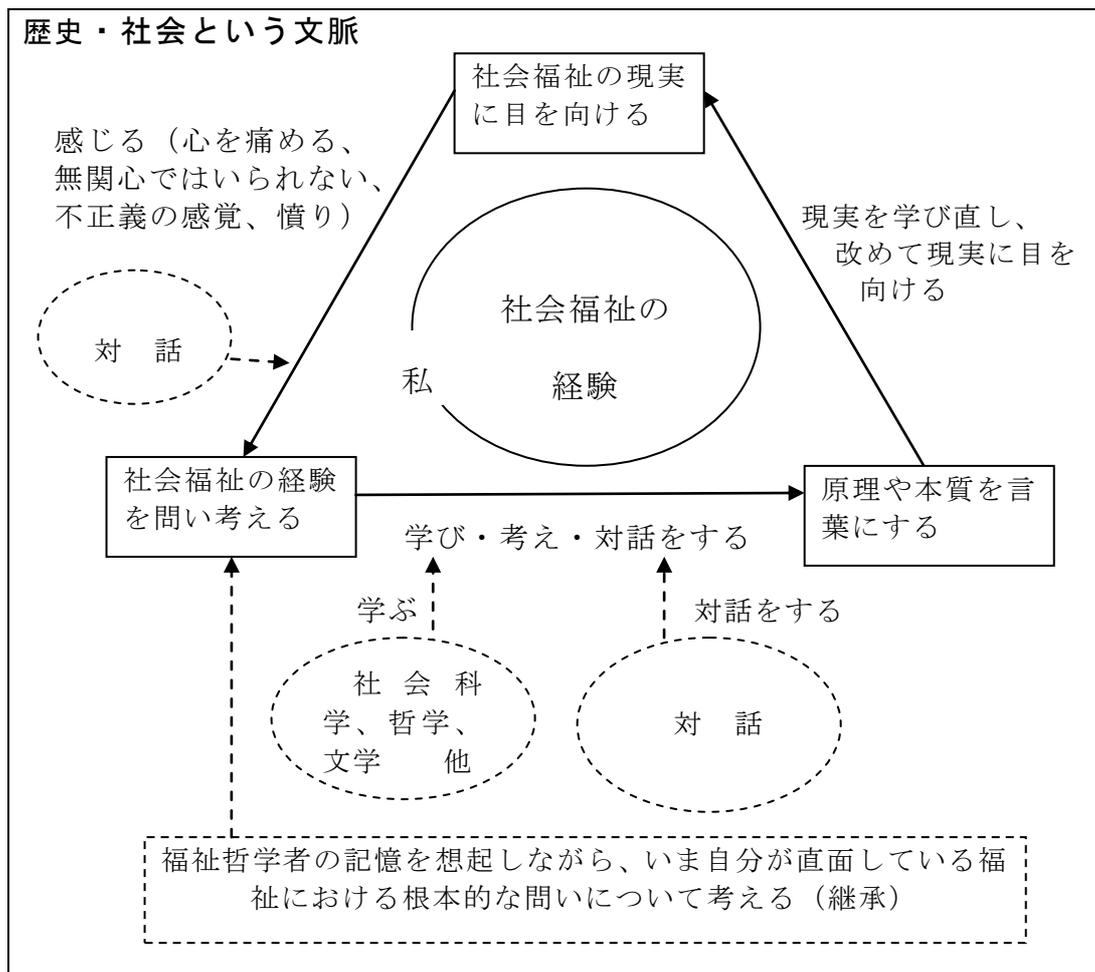


図1 福祉哲学の枠組みとプロセスに関する仮説

5. 考察（本セッション設定の趣旨に対する見解）

（1）社会福祉哲学の課題に対して

福祉哲学は問い考えるという思考の運動であり、その思考が明らかにした社会福祉の本質や原理、価値観、人間理解を体系化した福祉思想である。

（2）社会福祉哲学の貢献に対して

福祉哲学は社会福祉の営みを縮小・衰退する力に抵抗する根拠を生み出す。そして、福祉哲学が生み出す福祉思想を基盤に社会福祉学が構想される。また、福祉哲学は社会福祉について問い考える主体を生み出すとともに、視るべきものの状況にいる人や人びとに対して「希望」をもたらす。